

Logbookと言語学習アドバイジングを統合した教室外Eタンデム：

日韓・日独比較から見えた示唆

Integrating Logbooks and Advising in Out-of-Class eTandem:

Insights from Japan–Korea and Japan–Germany Projects

脇坂真彩子、九州大学

Masako Wakisaka, Kyushu University

wakisaka.masako.898@m.kyushu-u.ac.jp

小林浩明、北九州市立大学

Hiroaki Kobayashi, The University of Kitakyushu

hkoba@kitakyu-u.ac.jp

著者について

脇坂真彩子：大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。九州大学留学生センター教員。日本語教育学を専門とし、2008年より対面式タンデム学習およびEタンデムの実践と研究に取り組んでいる。

小林浩明：名古屋大学大学院国際開発研究科博士前期課程修了。修士（学術）。北九州市立大学国際教育交流センター教員。タンデムでは、協働学習と互惠性が学習者オートノミーに及ぼす影響に関心を持つ。

要旨

本稿では、日本-韓国および日本-ドイツの2つのEタンデム実践を比較し、振り返りを支えるLogbookと言語学習アドバイジングの位置づけが学習者の行動と継続にどのように関与していたかを検討する。Eタンデムは互惠性と学習者オートノミーを原則とする学習形態であり、その継続には内省を促す仕組みが重要である。両プロジェクトは共通のガイドラインとセッション構造を採用していたが、日韓EタンデムではLogbookとアドバイジングが任意であったのに対し、日独Eタンデムでは両者が標準プロセスとして組み込まれていた。結果として、日韓Eタンデムではアドバイジング利用は確認されず、Logbookの継続的な記入者も1名にとどまった。一方、日独Eタンデムでは全員がLogbookを継続的に記録し、アドバイジングを通じて目標設定や学習ストラテジーの調整が促進され、経験の共有も促され、全ペアが活動を継続した。以上の比較から、学習者オートノミーの発達段階に応じた適度に構造化された枠組みと内省を促す継続的なサポートの重要性が示唆された。

キーワード：タンデム学習、学習者オートノミー、Logbook、言語学習アドバイジング、内省支援

This paper compares two eTandem projects—Japan–Korea and Japan–Germany—to examine how the positioning of logbooks for reflection and language learning advising influenced learner behavior and continuity. eTandem is grounded in reciprocity and learner autonomy, and mechanisms that promote reflection are essential for sustaining engagement. Although both projects adopted shared guidelines and a common session structure, their support systems differed: in Japan–Korea, the logbook and advising were optional, whereas in Japan–Germany, both were integrated as standard components. Consequently, no participants in the Japan–Korea project used advising, and only one student continued logbook entries. In contrast, all participants in the Japan–Germany project maintained consistent logbook records, and advising sessions facilitated goal setting, strategy adjustment, and the sharing of learning experiences, with all pairs sustaining their activities. The comparison suggests the importance of an appropriately structured framework aligned with learners’ developmental stages of autonomy, together with continuous support that promotes reflection.

Keywords: tandem learning, learner autonomy, logbooks, advising in language learning, reflective support

Eタンデムは、互惠性と学習者オートノミーの原則に基づき、異なる母語話者同士がオンラインで相互に言語・文化を学ぶ学習形態である (Little & Brammerts, 1996)。本稿では、学習者オートノミーを、外部からの構造的な支援が乏しい環境下においても自律的に学習サイクルを管理・継続できる能力として捉える。また、それは発達的な性質を持ち、学習者のレベルや学習環境に応じた適度な構造化が必要とされる (脇坂, 2014; Schwienhorst, 2009)。必ずしも理想的な学習環境でなくとも、既存の枠組みの中で教師や支援者の工夫により、学習者オートノミーを支援することは可能である (青木・中田, 2011)。

先行研究では、Eタンデムがコミュニケーション能力や異文化間能力の向上、学習者オートノミーの発達や学習動機の維持・向上などに寄与することが示される一方 (Lewis & Walker, 2003; Wakisaka, 2018)、効果的なEタンデムには内省を促す仕組みが成功の鍵となる (Schwienhorst, 2009)。本稿の目的は、1) 日本-韓国および日本-ドイツの2つのEタンデムの実践内容と枠組みを概説し、2) 振り返りを支えるLogbookと言語学習アドバイジング (以下、アドバイジング) の組み込み方の違いが学習者の行動や学習活動の継続にどのように関与していたかを比較検討し、3) その知見に基づき、Eタンデムにおけるサポートの組み込み方について示唆を導くことである。

背景：振り返りをサポートするツールとしてのLogbookと言語学習アドバイジング

Eタンデムの継続を左右する要因として、目標言語の学習機会、学習時間、初期動機の性質、取り組みの度合い、学習内容の調整、パートナーとの交渉可能性等が指摘されている (脇坂, 2014)。また、Schwienhorst (2009) はEタンデムでの学習環境において、振り返りを促す学習環境の整備が気づきの深化や学習ストラテジーの更新につながることを報告している。

こうした先行研究を踏まえ、本研究で扱う2つのプロジェクトでは、学習者の内省を体系的に支援するためにLogbookとアドバイジングを導入した。Logbookは第一著者がタンデム学習における学習者自身の振り返りを促す目的で独自に開発したウェブアプリケーションである。アプリには学習目標のパートナーとの共有、学習計画や振り返りの記録、学習内容リストの閲覧といった機能が備わっている。また、支援者が学習者の記録を随時確認できる仕組みを有しており、学習状況の把握と問

題発生時の適切な支援を目的として、アドバイザーが Logbook の記録を適宜確認することについては、事前に参加者に説明していた。アドバイジングは、不安の軽減や課題の明確化、学習ストラテジーの調整を対話的に支援する場と位置づけられる (Elstermann, 2016)。それは、学習内容や方法を指導・評価するものではなく、対話を通して学習者の気づきと意思決定を促すプロセスである (Mynard & Carson, 2012)。本プロジェクトのアドバイジングでもこの理念に基づき、助言よりも問いかけを重視し、学習者が自身の学習を再構成できるよう支援した。タンデム学習におけるセッション内の振り返りがパートナー間で直前のやり取りの共有・確認を目的とするのに対し、アドバイジングはセッション外に設けられた第三者との対話の場であり、学習過程全体を俯瞰的に捉え直すことに主眼を置く。Logbook との併用により、学習者の内省を多面的に支える枠組みとして機能することを意図した。

事前ガイダンスと E タンデム・セッションの構造

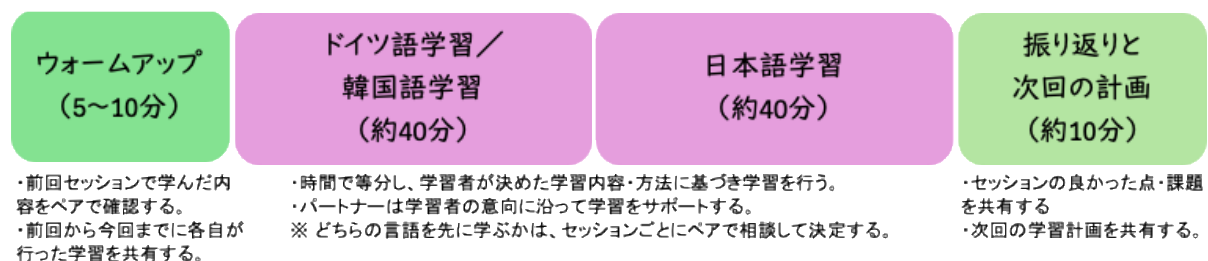
両プロジェクトでは、週に1回Eタンデム・セッションを実施し、参加者ごとに合計7~9回のセッションが行われた。参加者は、事前ガイダンスを受けた後にパートナーと連絡を取り、初回セッションの日程を調整し、学習活動を開始した。

事前ガイダンスでは、書面によるガイドラインに基づき、Eタンデムが学習者オートノミーと互惠性を原則とする学習形態であり、プライベートレッスンや日常的な交流とは異なる特性をもつことを説明した。加えて、具体的な進行方法、学習目標の設定と振り返り・計画の重要性、Logbookによる記録の役割、アドバイジングの位置づけを共有し、効果的な実践のためのヒントを示した。

1回のEタンデム・セッションは、次のような構造で行われる。

図 1

1回のEタンデム・セッションの流れ (1時間半の場合)



なお、両プロジェクトとも、コーディネーターの負担や運営上の制約を踏まえ、実施方法が設計された。

日韓Eタンデム

日韓Eタンデム・プロジェクトの概要

日韓Eタンデムは2024年11月下旬から2025年1月下旬にかけて実施され、11ペア（22名）が参加した。参加者は、日本語を学ぶ韓国側の学習者（CEFR A2–B1）と韓国語を学ぶ日本側の学習者（CEFR A2–B2）で構成され、いずれもEタンデムへの参加は初めてであった。学習活動は課外での自主参加を基本とした。

Logbookについては、操作説明動画の提供と利用の呼びかけは行ったが、その利用は任意とし、必要に応じた活用を促した。アドバイジングについても同様に、希望者を対象として実施することが事前に共有されていた。

日韓Eタンデムにおける観察結果

日韓Eタンデムではアドバイジングの利用者はおらず、Logbookを継続的に記入した学習者も1名にとどまった。多くの参加者はセッションには参加していたものの、記録や振り返りの実施状況や活動の継続状況は十分に確認できていない。これは、ペア間の活動状況が原則として参加者の自発的な連絡に依存しており、全体の活動状況を把握する仕組みがなかったことによる。そのため、活動の実態を外部から捉えることが難しく、結果として、問題解決をサポートする仕組みが学習過程に十分に組み込まれていないと言いがたい。

Logbookへの記入を唯一継続した学習者（以下「ミキ」）は、事後インタビューにおいて、Eタンデムでの経験を韓国語使用に対する肯定的な体験として捉えていた。また、この経験が契機となり、翌学期の留学生チューターへの応募につながったと述べている。一方で、「アドバイジングを受けていれば、良い意味で緊張感が生まれたのではないか」とも述べており、サポートが枠組みに組み込まれていた場合、学習への主体的な関わりが促進された可能性が示唆された。さらにLogbookについても、「前回の内容を思い出すのに役立った」と述べており、記録が振り返りの手がかりとして一定の機能を果たしていたことが確認できた。また、ミキの語り

からは、学期の移行や生活上の変化が活動の継続に影響し得ることが見て取れる。ミキはプロジェクト終了後もEタンデムを継続していたが、両者の学期開始のタイミングが重なり、結果として活動が途絶えたと述べている。このことは、継続の意思があっても、外的要因の重なりによって活動が維持されない場合があることを示している。

以上を踏まえると、日韓Eタンデムではサポートが希望者に委ねられていたため、活動を振り返り、調整する機会が限られていた可能性がある。Eタンデムの継続や中断のあり方は一様ではないが、サポートが学習過程に組み込まれていなかったことが、内省や学習調整に影響していたと考えられる。

日独Eタンデム

日独Eタンデム・プロジェクトの概要

日独Eタンデムは、2024年11月初めから2025年1月中旬にかけて実施され、8ペア（16名）が参加した。参加者は、日本語を学ぶドイツ側の学習者とドイツ語を学ぶ日本側の学習者で構成され、いずれもCEFR A1-A2レベルでEタンデムへの参加は初めてであった。日本側は課外の自主参加を基本とし、ドイツ側はアドバイジングへの参加と学期末のポートフォリオ提出により単位取得が可能であった。

Logbookの使用およびアドバイジングは学習プロセスに組み込まれ、標準的な枠組みとして運用された。Logbookについては、初回セッション前に学習目標を記入し、各セッションの前後に学習計画および振り返りを記録することが求められていた。

日独Eタンデムにおけるアドバイジング

アドバイジングは、表1に示す3段階で計画的に実施した。各セッションは第一著者が担当し、1回約60分で行った。形式は主に対面とし、状況に応じてオンライン（Zoom）を併用した。特に、学習者がEタンデムでの経験を振り返り、それを踏まえて今後の学習をどのように改善できるかについて、対話を通して主体的に検討できるよう支援することを重視した。

表 1

日独Eタンデムにおけるアドバイジング・セッション

実施時期	形式	主な内容・目的
アドバイジング① (初回前)	グループ/対面	<ul style="list-style-type: none"> ・学習目標の具体化 ・初回セッションの準備 ・効果的に進めるためのヒント ・不安の共有と対策の検討
アドバイジング② (第1・第2回後)	個別/少人数 対面・オンライン	<ul style="list-style-type: none"> ・初回の振り返りの共有 ・課題の把握と改善策の検討 ・他者の実践からの学び
アドバイジング③ (第6回後)	少人数グループ/対面	<ul style="list-style-type: none"> ・学習経験の共有 ・目標達成の自己評価 ・今後の学習計画の検討

日独Eタンデムにおける内省の特徴

日独Eタンデムでは、全参加者が学習期間を通じてLogbookを継続的に使用し、3回のアドバイジングに参加した。以下では、その記述および事後インタビューの発話をもとに、内省の特徴を整理する。

まず、Logbookの役割についてみると、ある参加者は、Logbookがタンデム・セッションの内容の想起を支えていたことについて次のように述べている。

Logbookは定期的な振り返りの機会になり、セッションがどんなものだったかを思い出す助けになったと思います。タンデムで交わした言葉や内容を書き留めることで、パートナーと何について話したかとか、何が興味深かったかを振り返ることができました。(中略)次に話す予定だったことを覚えるためのメモとしても役立ちました。(インタビュー)

この語りから、Logbookは学習内容の把握と次回への接続を支える振り返りのツールとして機能していたことがわかる。また、学習目標の調整や進捗の整理など、学習の見直しを支える役割も複数の記述から確認できた。

次に、アドバイジング・セッションの役割についてみると、別の参加者はアドバイジングが学習活動の選択に影響を与えた経験について、次のように述べている。

アドバイジングで、Oさん(=他の参加者)が、パートナーの影響で寝る前に(ドイツ語の)ポッドキャストを聴いていると話していたので、私ももっと実践的なことを試すべきだと思い、YouTubeでドイツ人の女の子がメイクや身支度をするVlogを見るようになりました。(インタビュー)

この発話から、アドバイジングは他者の実践の共有を通して学習の選択肢を広げ、学習行動の調整を促す契機として機能していたことが窺える。さらに、困難の共有やその解決、学習ストラテジーの調整にも関与していたことが確認された。

以上より、①Logbookが学習の継続を支える手がかりとなっていたこと、②アドバイジングが他者の実践を通じて学習行動の変容を促していたこと、③経験や困難の言語化を通じて学習調整が行われていたことが特徴として挙げられる。こうした支援のもとで全参加者が活動を継続し、終了後もその継続が見られたことから、内省の習慣化と共有の機会が継続を支える要因として機能していたと考えられる。

考察：二つのEタンデム実践の比較

両プロジェクトはガイドラインやLogbookなどの基本要素を共有していたが、サポートの組み込み方の違いにより、学習者の行動と継続状況に差が認められた。日韓Eタンデムでは、Logbookは推奨にとどまり、アドバイジングも希望制であったため、学習過程の中に十分に位置づけられていなかった。一方で、日独Eタンデムでは、Logbook記入と3回のアドバイジングが標準的なプロセスとして組み込まれており、全員が継続的に記録を行い、アドバイジングを受けられる条件が整えられていた。

この違いは、学習者にどこまで任せるかという問題ではなく、Eタンデムの枠組みの自由度と構造化のバランスの差として説明できる。脇坂(2014)が指摘するように、参加者の学習者オートノミーの発達段階やローカルな制約・資源を踏まえ、過度に自由すぎず、かつ拘束的でない「適度な自由度」をもつ枠組みを設計することが、学習の継続を支える。日韓Eタンデムでは、自由度の高い設計のもとで学習者が調整方法を見出しにくかった可能性がある一方、日独Eタンデムでは、適度に構造化された枠組みが学習行動を支えていたと考えられる。

例えば、初期段階ではアドバイジングを必須とし徐々に任意へ移行する、あるいはLogbookの記入頻度を段階的に調整するなど、柔軟な設計も考えられる。任意参加型のサポートは「必要なときに利用するもの」と捉えられやすく、日常的な振り返りや問題の早期把握につながりにくい。また、相談のタイミング判断や依頼に伴う心理的負担により利用を抑制した可能性がある。対話を通じて初めて課題が顕在化する場合も多く、希望制では潜在的な支援ニーズは表面化しにくい。

以上の知見を踏まえると、サポートの設計には実践上の配慮も重要となる。課外で行われるEタンデムでは、コーディネーターの負担を踏まえ、アドバイジングの実施時期や回数の調整、個別・グループの併用、対面とオンラインの使い分けなどにより、負荷を適切に分散することが求められる。

結論

本稿では、日韓と日独の二つのEタンデムの実践を比較し、Logbookとアドバイジングの組み込み方が学習者の行動に与える影響を検討した。サポートが任意であった日韓Eタンデムでは、Logbookの継続的記入者は1名にとどまり、アドバイジングの利用も確認されず、サポートが学習過程に組み込まれていたとは言いがたい。一方で、両者を標準的なプロセスとして組み込んだ日独Eタンデムでは、定期的な振り返りが定着し、全員が学習期間を通じて活動を継続した。

これらの結果は、学習者オートノミーの発達段階や学習環境に応じた「適度に構造化された枠組み」の重要性を示している。特に、タンデム学習の経験が浅い学習者や、学習者オートノミーを活かした学習に不慣れな学習者にとっては、学習開始段階のアドバイジングや、Logbookによる継続的な振り返りを促す仕組みが、Eタンデムの進め方の理解および学習活動の調整を支える重要な役割を果たしたと考えられる。

ただし、学習者オートノミーの発達段階には個人差が大きく、すべての学習者が同一のサポートを必要とするわけではない。そのため、枠組みには一定の標準化したサポートを組み込みつつも、学習者が自らに合ったサポートの受け方を選択できる柔軟性を確保することが重要である。これらの知見はタンデム学習に限らず、自律的学習の実践全般においても、学習支援の構造のあり方を検討する上で示唆を与えるものである。

今後の課題

本稿は、性質の異なる2つのEタンデム実践の比較を通じて示唆を導いたものである。特に日韓Eタンデムでは活動状況の把握が限定的であり、その知見は探索的に解釈する必要がある。今後はLogbookの記述やアドバイジングの対話データをより詳細に分析し、内省および意思決定の過程とサポートとの関係を明らかにする必要がある。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費（基盤研究C、課題番号：22K00712）の支援を受けて行われました。ご協力いただいた参加者の皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 青木直子・中田賀之編. (2011). 『学習者オートノミー：日本語教育と外国語教育の未来のために』. ひつじ書房.
- 脇坂真彩子. (2014). 『Eタンデムにおける動機づけのメカニズム：日本語学習者とドイツ語学習者のケース・スタディ』 [博士論文]. 大阪大学文学研究科.
- Elstermann, A. K. (2016). *Learner support in telecollaboration: Peer group mediation in teletandem* [Unpublished doctoral dissertation]. Ruhr Universität Bochum.
- Lewis, T. & Walker, L. (Eds.). (2003). *Autonomous language learning in tandem*. Academy Electronic Publications.
- Little, D., & Brammerts, H. (Eds.). (1996). *A guide to language learning in tandem via the internet*. CLCS Occasional Paper, No. 46. Trinity College, Center for Language and Communication Studies.
- Mynard, J., & Carson, L. (Eds.). (2012). *Advising in language learning: Dialogue, tools and context*. Pearson.
- Schwienhorst, K. (2009). The art of improvisation: Learner autonomy, the learner, and (computer-assisted) learning environments. In F. Kjisik, P. Voller, N. Aoki, & Y. Nakata (Eds.), *Mapping the terrain of learner autonomy: Learning environments, learning communities and identities* (pp. 86–117). Tampere University Press.
- Wakisaka, M. (2018). The differences between face-to-face tandem and eTandem which influence the maintenance of tandem learning activities, *Revista do GEL*. Special

Logbookと言語学習アドバイジングを統合した教室外Eタンデム

issue for e-tandem learning and telecollaboration.

<https://doi.org/10.21165/gel.v15i3.2408>